

二〇一〇年度 第一回 入学試験問題(国語)

晃華学園中学校

* 答えはすべて解答用紙に記入すること。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

おじさんは玄関の敷石に煙草をぐりぐり押しつけて消し、それを庭先にぽいと投げ捨てると、またあたらしい煙草に火をつけて、なにも言わずにぼんやり外を見ていた。田舎の家だから、玄関といってもホールみたいな広くて、天井が高い。剥き出しになった梁に、今年できたばかりの燕の巣があった。南にむいたガラス張りの引き戸は鳥たちのためにいつも少しだけ開けてある。長方形の枠の上半分に、盛り土のうえを走る線路の高架線が見えた。そのうちおばさんが戻ってきて、短冊みたいな布きれを手渡してくれた。紐をゆるめてその布を二枚重ねに入れてみると、サポーターでもしたみたいに足首を軽く締めつける感覚があつて、靴と足がぴたりと吸いついた。手で持つと重いのに、実際に立って歩いてみたらふしぎと軽い。どうやら思わず知らず笑みを浮かべていたらしい。それまで面倒くさげに煙ばかり吐きだしていたおじさんの表情が、①心なしかやわらいだような気がした。やっぱり母さんに似てる、と少年は思う。笑みを浮かべると左の頬だけに力が入って、唇の端がくいつとつりあがる。

「ちゃんとふたりぶん入ってるだろうな」

「食べきれないくらいおにぎりが入ってますよ」

「ツナはある？」②少年がおずおずとたずねた。母親が仕事帰りに買ってきてくれる、マヨネーズで和えたツナのおにぎりが大の好物だったのだ。声をあげて笑い出したおばさんの口もとからのぞいた奥歯に、銀色の詰めものが鈍く光った。

「ツナはないよお、ごめんね。うちはいつも梅干しと昆布、それから鮭。おかずに甘い卵焼き。ついでに鶏の唐揚げも」

「坊主」トンネルのおじさんが煙草をくわえたまま言う。小僧とか坊主とか、そんな呼び方はテレビの時代劇でしか知らなかったのははじめはびっくりしたが、坊主がお坊主のことではなくて自分を指していることくらいはわかる。X、わんぱく坊主の坊主だ。

「握り飯にツナだのマヨネーズだのを入れるなんてな、面倒くさがりが適当に考えたいんちきだ。おまえの母さんは仕事帰りにできあいのものを買ってくるだけだからわからんだろうが、うちは梅干しだって昆布だって自家製だぞ。文句を言うな」

「聞いたけどだよ」

「腹が減ってればなんだったってうまいもんだ、それより水筒を忘れるな」おじさんは彼に弁当の入ったリュックを持たせた。水たまりがひどいから車を寄せると言つて、あいかわらず煙草をくわえたまま、玄関口を左に折れた先の、農具や工具が置いてある納屋のほうへ歩いていく。昨晩の雨で未舗装の山道から泥水が流れ、あちこちに深く茶色い水たまりをつくっていた。荷台の囲いがでこぼこになった白い軽トラックは、その納屋のとなりの、トタンで屋根をふいただけで壁も扉もないむきだしの車庫に収まっていた。車庫まえの赤茶けた道は裏山につうじているのだが、五分ほどのぼつたところに柿の木が群生している。

毎年秋、段ボール箱いっぱい送られてくるいびつな柿がどこでとれるかを教えてくれたのは、少女時代、兄とふたりで好き放題に柿をいじったという母親で、ほら、またトンネルのおじさんから柿が送られてきたわよと③嬉しそうに言つて、そのたびに郷里の柿の木の話を語って聞かせるのだった。田舎にはぜったい帰りたいくないというきつい言い方とは裏腹に、そういう思い出話になると母親の記憶はじつにこまかいところまで光を当てることができるらしく、④興に乗ると——コンビニの弁当をつまみに缶ビールを飲んだりしたときだが——チラシの裏に地図を描き、家のまわりにはこういうのがあつて、柿の木はここ、クヌギはここ、栗の木はこの辺だったし、いまもあるはずと言葉はとどなく流れ出た。

母親が自分の兄のことをトンネルのおじさんと呼ぶようになったのは、少年が三歳になるかならないかのころだったらしい。正月にはじめて家族で帰省して三が日を過ごし、東京にもどってほとといきついたとき、少年がとつぜん、たどたどしい口調で、トンネルのおじさんのところ、楽しかったね、また行きたいね、と高い声をあげたのである。一瞬、ふたりともなんのことやらわからずぼんやりしてしまつたのだが、ああ、義兄さんのことだろ、たぶん、と父親のほうに気づいて大笑いになり、以来、ずっとその綽名でとおしてきた。

「弁当といっしょに乗れ」

右肘を窓枠にかける片手運転でおじさんが言う。急いで反対側にまわって乗り込むと、おばさんが外まで見送りに出てきて、いつてらっしゃいと小さく手を振った。柿の木の道に車をもどし、山に入っていく。家とそのまわりではあんなに吸っていた煙草を、おじさんは口にしなくなっていた。

「山では昼飯のあと一服するだけだ。だいに吸つて、だいにのみ消す。火事がいちばん怖い」

「でも、雨が降って木は湿ってるよ」少年が言うと、⑤おじさんは感心したようにちらりと助手席を見た。

「そうだな。天気つづきでからつとするとときよりは、心配がない。だが心配することと用心することは、似てるようでちがう。心配つてのは、用心しない者が口にする言い訳だ。煙草はもう一日分吸ってきた。あとはおまけ、ご褒美だ」

それからしばらく、黙つたまま揺れに身をまかせた。心配と用心はちがうというおじさんの説明が、やっぱり少年にはぴんとこない。用心深い運転なんてしてないじゃないか。おまけに、場所によって陽が差したり差さなかったりするので、耳ばかりか目の奥までおかしくなってくる。

おじさんは湧き水が流れている小川の横にあった楕円形の空き地にトラックを停めた。弁当と水筒の入ったリュックを少年に背負わせて、じぶんは細ながい麻袋をかついで先に歩きます。袋のなかには、太小のシャベル、ツルハシ、そしてこのぎりなど、山登りとは関係のない道具が一式入っていてかなり重そうだったが、手を貸すわけにもいかなかった。

夏休みに入つてすぐ、どうしてもお父さんと話し合わなければならないことがあるからと、母親は少年を兄夫婦にあずけた。ここに着いた日は平日だったので、迎えに来てくれたあとおじさんはすぐまた仕事に出て、翌日に母親だけ帰っていったから、一対一で向き

あうのは今日がはじめてだった。東京では、親しみをこめて「トンネルのおじさん」なんて呼んでいるけれど、父親が家に戻ってこなくなつてから一年以上になるし、学校の先生以外に大人の男のひとと話をする機会もなかったから、言葉を出すタイミングがうまくつかめない。遊びに飽きたら畑の仕事でも手伝えばいい気分転換になるなんて母さんは適当なこと言っていたけれど、夏の工作だけはまだなにをつくるかすら考えていなくて、それを食事のときふと漏らしたら、食卓でもくわえ煙草のおじさんが、じゃあ、木でなにかこしらえてみる、材料ならいくらでもある、と少年を見た。

「木っ端や枝を使う工作は、もう友だちがやってる」

「じゃあ、根っこを使えばいい」

「根っこって……」

「そこにある」

食堂から見える居間のテレビの横に、いぼいぼ (a) のある蛸みたいな木の根が、蛍光灯の光を照り返しながら艶やかに鎮座していた。鮎色の木肌がくねくねして、外国の物語で知ったグロテスク (＝不気味な様子) という言葉を連想させる。顔に出たのだろう、おじさんがめずらしく笑顔になつて、そう怖がることはないと言つた。

「おなじものをつくるわけじゃない。それだつてもとは頼まれ仕事だ。農閑期といつてな、暇なときにつくる。こういう飾りもの (b)

の好きな連中がたくさんいるんだ。根を掘りだして、いろんなかたちに見立てる。その気になれば蛸に見えたり、カニに見えたり、ひとの顔に見えたりする。節も、傷も、みんなちがう。それを生かして、よけいな部分を伐る。水で洗って、皮をはいで、木肌を出したらワックスをかけて磨く。それだけだ」

「おもしろい？」

「どうだろうねえ」とおばさんが代わりに応えた。「釘を打つたりしないから、工作にはならないかもしれないけど、でも、せっかく田舎に來たんだし、田舎のおじさん (c) の言うこと聞いてみたら？」

「田舎のおじさんとはなにごとだ」

「だって、いまどき木の根っこを掘って磨くなんて、⑥ どんなに想像力のある子どもでも考えつかないわよ」

おじさんは不機嫌そうにビールをあおり、その気があるなら日曜日に連れて行つてやる、小さい (d) のを掘り出せば、あとはひとりでぜんぶできると言つた。

地面はあいかわらず砂利と赤い剥き出しの土で、見るからに滑りそうだったが、おじさんのあとをわざと追わずに道のわきの下草を踏んでみると、むしろそちらのほうが危ないようだった。都会育ちの少年の語彙に ⑦ ぬかるみという単語はないに等しい。山道には湿つた草木の香りが満ちていて、酸っぱいような臭いような、あまり気持ちよくない種類のものもあつたのだが、そういう複雑な匂いのする道を跳ねたりジグザグに進んだりしながらのぼっていくのは、車に乗っているときの数倍も楽しいと少年は思った。おばさんが用意してくれた日本手拭いの切れ端のおかげで、靴のぐあいもいい。ずっとまえから履きなれている靴みたいに足になじんできていた。

「大丈夫か」おじさんは少年が寄り道をして足音がやや離れると、すぐに振り返つてたずねる。声をかけなくとも、五分に一度は振り向いて姿を確認する。

「大丈夫」

「いま休むとかえつて疲れる。このまま行くぞ。リュック、重くないか」

「うん」

「重かつたら、持つてやる」

砂利はなく、ひとが踏み固めたのか、土の感触がこれまでよりどつしりしている。そこから二十分ほど黙って歩きつづけたところ、おじさんが、お、と声をあげ、横道に大股でさがさ分け入って、ひとつの切り株に近づいていった。

「もつと先まで行くつもりだったが、こいつでよさそうだ」

かついでいた袋からスコップを出して、おじさんは根本の土を先でつづいた。地表は雨のおかげかやわらかそうだった。一部の土を取り除いて出てきたもつと固い土を、今度はツルハシの先で試掘する。何度か突き刺しているうち、大きな石にあたつてがちゃんと音のすることがあつたが、あとは土ばかりのようだ。よし、やってみると軍手を渡されて、少年は砂場で遊ぶスコップが大型になったようなシヤベルを握り、反対側を掘りはじめた。しかし、見た目からは想像もできないほど深く地中にくいこんでいて、子どもの力ではなかなか歯がたたない。アカメガシだ、瘤にいぼいぼがある、そういうのを欲しがる物好きがいてな、とつぶやいて、ああそうだった、こいつはもちろんおまえのだ、と言いなおした。こんなに頼りなげな木なのに、根だけは中型犬までなら簡単に包めそうなくらいがっしりと張っている。たとえ最後まで掘り出せなくても、日記に書いておくだけでじゅうぶんさまになるだろう。少年は感嘆しながら手を動かしてつづけた。

「潮干狩りみたい」

思わず口に出すと、おじさんは顔をあげて、そうだな、と片頬だけで言つた。

「去年、海の家に行つて、潮干狩りした」

「母さんで行つたのか」

「うん。ふたりに行つた」

「⑧ そうか……海と山で、贅沢なやつだな」

根に巻き込まれた石をツルハシで砕いて、かけらをひとつずつ拾いあげていくと、ゴボウみたいな髭のある細い根がだんだんあらわになり、土と根のあいだに空隙ができて手が入るようになってきた。ごつごつした根の中心が見え隠れする。ふたりとも、なにも喋らずひたすら掘りつづけた。さすがにトンネルのおじさんだ。綽名の由来はもちろん知っているけれど、これだけ軽快で力強い穴掘りの技を見せられると、どこかでほんとうにトンネルを掘っていたんじゃないかと思えてくる。木を傷めないよう徐々に掘る手の力を弱めていく。ぐらぐらして、あとひと息のめどがたつたところで、そろそろ昼にしようとおじさんはい、穴から離れた木の下で斜面に

ビニールシートを敷いて弁当をひろげた。軍手をしていたのに細かい砂が入って、指先まで真っ黒になっている。それをおしぼりできないにふき取った。四角い布巾を濡らして固く絞り、まるめてビニール袋に入れただけの、真正正銘のおしぼりだ。母親が買ってくる弁当には甘ったるい薬品の匂いのするウェットティッシュがついているけれど、どうしてもそれを受けつけられない少年にはありがたいことだった。

おにぎりはひとつひとつが大きくて、重くて、丸々している。ぴたりと巻きつけられた海苔に米粒の水分がしみてしっとりしているのも、色紙の細工みたいなパリパリした海苔のおにぎりばかり食べている身にはめずらしい。ひとくち頬張ると、指先にも、歯にも、かけらが張りつく。おじさんの前歯にも、黒いしみがいつぱいできた。米粒だって不揃いだけど、こんなにおいしいおにぎりは食べたことがない、ツナなんてぜんぜん必要なかった、と少年は素直に感動した。

(堀江敏幸「トンネルのおじさん」)

問一——線部①「心なしに」、④「興に乗る」の意味として最も適当なものを、それぞれ次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---------|---|
| ①「心なしに」 | ア なにげなく
イ 心にもなく
ウ なんとなく
エ 思いもよらず |
| ④「興に乗る」 | ア 夢中になる
イ 思いあがる
ウ 酒に酔う
エ 勢いにまかせる |

問二——線部②「少年がおずおずとたずねた」とありますが、このときの少年の気持ちを説明したものととして最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 主張しすぎてわがままだと思われたくはないが、ツナのおにぎりがなかったらどうしようと心配になっている
イ おじさん夫婦に対してまだ遠慮があり質問しづらいが、ツナのおにぎりがあるかはやはり気がかりである
ウ 慣れない環境にとまどいつつも、自分の気持ちはしっかり伝えていかなければならないと考えている
エ ツナのおにぎりに特別こだわっているわけではないが、なるべく多く会話を交わし早くうちとけようとしている

問三——**X**を補うのに最も適当な語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 海坊主 イ 茶坊主 ウ 三日坊主 エ てるてる坊主

問四——線部③「嬉しそうに言って」とありますが、このときの母の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア めったに田舎に帰らない妹のもとへ、毎年欠かさず柿を送ってくれる兄の優しさが身にしみている
イ 兄が送ってくれた柿を見て、兄と田舎で過ごした子ども時代の思い出を懐かしく思っている
ウ 兄の方から柿を送ってくれたおかげで自分が田舎まで受け取りに行く手間が省け、ほっとしている
エ 田舎に帰るのはいやだったが、子どものころから好きだった柿が手に入り満足している

問五——線部⑤「おじさんは感心したように」とありますが、なぜ感心したのですか。五十字以内でわかりやすく説明しなさい。

問六——線部(a)～(d)の「の」のうち、他とは違う使い方をしているものを一つ選び、記号で答えなさい。

問七——線部⑥「どんなに」考えつかないわよ」とありますが、なぜそう言えるのですか。理由として最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 都会の子にとって、木の工作といえば木つ端や木の枝を使ったものを思い浮かべるから
イ 現代の子どもたちは、土を掘ったり木を伐ったりという作業に慣れていないから
ウ 木の根を使った工作が流行したのは、今の子どもたちが生まれるよりも前のことから
エ 地上に現れているものと違って、地下にある木の根は見過ごされがちなものだから

問八——線部⑦「ぬかるみ」という単語はないに等しい」とありますが、どういうことですか。二十五字以内でわかりやすく説明しなさい。

問九——線部⑧「そうか」贅沢なやつだな」とありますが、ここからうかがわれる「おじさん」の気持ちとして最も適当なものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 母親とふたり暮らしでありながら、様々な体験をさせてもらえる少年のことを、心の底からうらやましく思っている
イ 少年の気持ちがおじさんには、これ以上家のことには触れず、明るい話題に変えるべきだと思っている
ウ わざとおおげさな言い方をするので、家族の問題をかかえている少年の心を、少しでも軽くしようと思っている
エ たとえ家庭に問題があっても、それにとらわれることなく、物事を前向きに受けとめてほしいと思っている

問十 次のア～エについて、問題文から読みとれることとして適当なものにはA、適当でないものにはBを書きなさい。全てA、あるいは全てBと答えてはいけません。

ア おじさんとともに田舎の自然にふれあうことで、少年は父親のいない寂しさを忘れることができた
イ 少年との交流を通して、かたくなだったおじさんの心もやわらぎ、少年のことを次第に思いやるようになっていく
ウ 少年は田舎での生活にとまどいを覚えつつも、自然のなかで初めて経験する出来事に新鮮さを感じている
エ 昨夜の雨が上がり、足場の悪い道を乗り越え木の根にたどり着いたことは、少年の明るい将来の暗示となっている

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

オノマトペとは、日本語の中にある、ゴーン(鐘)、キーン(飛行機)のような擬音語と、クルクル(回転)、ピカピカ(輝き)のような擬態語とを一括して言うものである。語源はフランス語で、発音はオノマトピーアのような感じになる。おおもとは古代ギリシア語にまでさかのぼり、造語すること、名前を造ることという意味があったとされる。「オノマトペ」という言葉にはなじみがなくて

も、擬音語・擬態語という言葉なら聞いたことがあるだろうし、ゴーンやキーンという言葉そのものを知らない、ということはまずないだろう。このオノマトペは意外にも奥が深く広く、日本語について、さまざまなことを教え、考えさせてくれるのである。

オノマトペはいかにもオノマトペらしいがたをしている。まず、オノマトペには「もと」がある。これがオノマトペの中核にあつて、基本的なニュアンスを形作る。そしてこの「もと」にさまざまな、オノマトペらしい成分をつけて、より細やかな味わいを重ねていく。これが根本構造である。

具体的にながめてみよう。たとえば「パラ」というオノマトペの「もと」で考えてみる。小さい「ッ」をつけてみよう。「パラッ」となる。どうだろうか。「パラッ」とページをめくる」などという表現を思いつく人もいるだろう。そう、いま、そうやってページをめくったのである。非常に瞬間的に行われる、軽い動作や動きをとらえている感じである。「リ」をつけてみよう。「パラリ」となる。「パラリとページをめくった」となる。前と同じような表現だ。①芸がない、そうも思える。しかし、それは本当に「パラッ」とページをめくった」とまったく同じだろうか。「パラッ」とページをめくった」というのがページをめくる、まさにその瞬間を描写しているようなのに対して、「パラリ」の方はページをめくる一連の動作と、めくり終わった後の、なにか落ち着いた雰囲気までも感じないだろうか。オノマトペの「もと」に「ッ」をつけるか「リ」をつけるかで微妙にニュアンスが違ってくるのである。次は「ン」をつけてみよう。「パラン」である。「パラン」なんてオノマトペはあるのだろうか。このようなときに便利なのはインターネットである。試みに検索してみる。するとあつた。「パランとギターを弾く」「髪をパランとかき上げる」「風でパランとめくれる」……そう多く例を見るわけではないが、現実に使われているのである。「ン」がつくと、それらの軽い所作や動きの結果が余韻として残っているようなニュアンスを感じさせる。今度は「パラ」を繰り返してみよう。「パラパラ」となる。「パラパラとページをめくる」……今まさにページをめくるときの、連続する動きが出てくるのがわかるだろう。「パラパラと雨が降ってきた」という例も思いつく。やはり今まさに続いているすがたを表している。

さてここまでで、オノマトペの「もと」に語尾「ッ」「リ」「ン」がつくとどうなるかを簡単にまとめると次のようになる。

「ッ」……非常に瞬間的な区切りがつくというニュアンスを表す。

「リ」……

「ン」……音や動作・状況がとりあえず終わりはするが、その結果や余韻が残るというニュアンスを表す。

「もと」の繰り返し……

「パラ」をもとにしたオノマトペはその「もと」のもつ明るさ、軽さ、乾いた雰囲気などを根本に置きながら、語尾をつけくわえたりそれ自体を繰り返したりしながら、さらに豊かなニュアンスを作り上げている。まさにオノマトペは語尾しだいである。②心の声を伝えるのである。

オノマトペの現代的意味を考えると、光の側面だけでなく、陰の側面にも目を向けてみたい。とはいってもオノマトペそのものが陰だというわけではない。オノマトペが映し出す陰の側面ということである。

最近、「むかつく」という言葉がはやっていて、いまでもしばしば使われている。「むかつく」はオノマトペ由来の言葉である。「むか」はオノマトペの「もと」であり、「つ」をつけたり繰り返したりして「むかつ」「むかむか」という言い方を生む。ただし他のオノマトペの「もと」につく「リ」や「ん」は使えない。けれども、「つく」という動詞をつくる要素について「むかつく」という言い方をつくることができるわけである。「ぎらつく」「がたつく」「ばたつく」「ねばつく」「ぐらつく」「C」など類例も多い。

この「つく」という要素が、オノマトペの「もと」についてできる動詞は、これらの例でもわかるように、あまりいい意味では用いられない。「むかつく」というのをよく聞くように思うのは、若い世代の、もつといえ、学校の生徒ぐらいの年齢の人々である。この「むかつく」はなんととはなしに腹立たしいが、どこがとか、なぜとか、そういうのがはつきりとは言い表せない、という特徴を持っているかのように思うのだがどうだろうか。何となく相手に対してむかついた気持ちを持つだけでも、それを理屈で説明しろと言われると、うまくできないのである。

まあ、そうである。③理路整然と説明できるのであれば「むかつく」なんて言葉を使わないですむ。

しかし、ここだと思ふのである。

「むかつく」と言われて、そうですか、と納得するのではなく、そこを理路整然と説明してもらい、そこに理があるのかどうかを判断しなければならぬのではないか、と思う。「むかつく」はオノマトペであるから、肉体的な表現である。だから逆に言えば理屈ではなくわかってしまえるというところがあるわけである。しかしそのような漠然としたところで納得していいのかと思う。漠然としたものは人にとってはつきりとした気分を与えない。漠然としたところそのものが、気持ち悪いのである。漠然としたままで「むかつく」などといって、それで納得してもらえるのはかえって不幸なのではないか。むしろ、あえて、そんな言い方では納得できない、理屈で説明して欲しいと、④わからず屋になることが必要なのではないか、とも思う。

オノマトペが必要とされる時代は、感覚や感性が優位の時代である。感覚や感性は、論理や理屈といったものよりもなにか数段上のような気分になる。しかし感覚や感性の先にあるものは感情であり、欲望であることも忘れてはならない。オノマトペの現代的意義を考えたとき、オノマトペが訴えかけてくるこのような陰の声にも耳を傾ける必要があるのではないか。

オノマトペの語源は、フランス語であつて、おおもとは古代ギリシア語にまでさかのぼり、「造語すること、名前を造ること」という意味があつたとされることはすでにふれた。それで思い出すのは『聖書』創世記である。その第2章には、神がアダムを造ったあと、「野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持つて来て人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となつた」(新共同訳)という部分がある。

人が鳥や獣に呼びかけたとき、何を手がかりにして呼んだのだろう。そこは、簡単にはわからない。想像するしかない。が、自然なのは鳥や獣がどう鳴くとか、どういう印象を心に与えてくるか、といったものではないだろうか。実物を見た経験があればその鳴き声が、呼び名の第一候補になつたのではないか。見たことがないものなら、それが自分の心にどう迫ってくるかで呼びかけたのではないか。オノマトペは⑤心の声なのである。もしそうだとすれば、まさに⑥オノマトペこそは、名前のもとである。だからオノマトペのものと意味は名前を造るということになるのではないか。日本語においても、オノマトペはまず、名前としてはたらいっている。

国語年々字(一四)

文法の用語でいえば、名詞ということである。オノマトペが名前として使われるものは、いろいろと指摘できる。たとえば子ども、いやもつと小さい乳幼児あたりの時期に、「ぶーぶー」は「くるま」を意味する。また子どもをあやす「ガラガラ」、おもちゃが、丸いカプセルに入っている「ガチャガチャ」も、ものの名前である。しかしなんといつても、もつとも大きな勢力は副詞であろう。たとえば、「光る」という言葉を、より具体的に説明するために、「きらきら」と「きらざら」と「ピカピカ」と「ピカビカ」と「きらつ」と「ぎらつ」と「ピカツ」と「きらり」「ざらり」などが使われ、細かなニュアンスを伝える。まさにすぐれもののコミュニケーション・ツール(気持ちや伝え合う道具)である。「ざらざら」を使わないで「ざらざら光る」と同じ意味のことを伝えるのは、至難のわざである。光りかたからその光りかたがどんなふうにも心理的にせまってくるのか、など、細かく言い始めるときりがないし、説明すれば、くどくなる。

こんなふうにならわれの周りには、オノマトペが大活躍しているのである。これを体系的にととのつたかたちで説明するのも面白い。ただ、あえてオノマトペを体系や法則にまとめようとはしてこなかった。それはこんな思いからである。

蝶が飛んでいる。何種類もの蝶が飛んでいる。それらの蝶をつかまえて、色や形で整理し、箱の中に並べる、というのも一つのやり方であろう。けれども、蝶の飛ぶままに、その姿をいつまでも見ていたい、というのがあってもいい。少なくとも私はそうしたいほうである。虫ピンに刺され、箱の中にとめられた蝶はもはや飛ばない。そうではなくて、飛び続ける蝶を、どこまでも追いかけていきたいのである。

(小野正弘『オノマトペがあるから日本語は楽しい』)

問一——線部①「芸がない」、③「理路整然と」の意味として最も適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ①「芸がない」
- ア 工夫されていい
イ 華やかでない
ウ 人には見せられない
エ 見栄えがしない
- ③「理路整然と」
- ア 相手が納得するように
イ 人の気に入るように
ウ きちんと筋道が通るように
エ 何となく伝わるように

問二——A、Bにはどのような内容が入りますか。文中の言葉を使って、それぞれ二十字以内で書きなさい。

問三——線部②、⑤の「心の声」とはどのような意味を持っていますか。説明として適当なものを次のア～エから二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 目の前の物や状況がどのようなものであるかを詳しく説明したもの
イ 目の前の物や状況がどのように自分の心に感じられたのかをあらわすもの
ウ はつきり言葉に表すと、相手を傷つけてしまうような本音のこと
エ ある動きや状況について、細かく微妙なニュアンスをあらわすもの
オ ある動きや状況について説明するとき、多くの人が用いる一般的な表現のこと

問四——Cにあてはまる言葉は何ですか。次に説明するニュアンスを持つ四字の言葉を書きなさい。

【目的もあてもなくただ歩き回ること】

問五——線部④「わからず屋になることが必要」とありますが、それはなぜだと考えられますか。次のア～エから最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 理屈を考え言葉にするということは日本語の表現力を磨くという点でとても大切であるから
イ 他人に対して、納得できないのにいつともなく同調するというのはあつてはならないことだから
ウ 肉体感覚は人それぞれ違うのに、自分だけの感覚を押しつけるような言葉は使うべきでないから
エ 理屈の通らない自己中心的な感情を、そのままにしておくのはいけないことだから

問六——線部⑥「オノマトペこそは、名前のもとである」とありますが、それはなぜですか。説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア オノマトペは論理や理屈より数段上に位置するものなので、名を付ける理由として優先されるから
イ 名前を考へるときの手がかりとしてふさわしいのは、自分の心にどう迫ってきたかをあらわす言葉だから
ウ 現代の日本語でも、実際に幼児がオノマトペをもとにものの名をよんでいる例はたくさんあるから
エ オノマトペは豊かなニュアンスを表せるので、多くの物に名前をつける方法はこれしかないから

問七——線部⑦「説明すれば、くどくなる」と筆者が言うのはなぜだと考えられますか。説明として最も適当なものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

- ア オノマトペとは理屈で言えるものではなく、直接人の心に理解される感覚的な言葉だから
イ オノマトペを理解するためにはたくさんの例をあげて説明しなくてはならないから
ウ オノマトペとは聖書に書かれた時代から存在しているので、すでに人間になじんでいるから
エ オノマトペは言葉に意味を付け加える働きがあるので、それ以上説明する必要はないから

問八——線部⑧「蝶をく並べる」とは、どのようなことをたとえていったものですか。本文からそれにあたる部分を「とすること」につながるように、二十字以内でそのまま抜き出しなさい。句読点や記号なども一字に数えます。

問九——線部⑨「蝶はもはや飛ばない」とは、オノマトペに関して言うところのどのようなことですか。自分の言葉で四十字以内で書きなさい。

三 次の①～④の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- ① キョシュによる採決 ② ヨウリョウがよい ③ オウロは険しい山道だ ④ ボール遊びでドウシンに戻る

受験番号	
氏 名	

*の欄には何も書かないこと

*

[illegible][illegible]

問一	二
①	
③	

[illegible]

問 三	
問 四	
問 五	
問 六	
問 七	

[illegible][illegible]

①	
	キ ヨ シ ユ
②	
	ヨ ウ リ ヨ ウ
③	
	オ ウ ロ
④	
	ド ウ シ ン

*

*

*

*

*

*